

「男、突っ走る！」

第13回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

井深	佐藤	西澤	藤野	杉山	中岡	濱口	木内	木内
武彦	隆篤	隆雄	真弓	優菜	壮吾	寧々	真保	雅也
(39)	(59)	(53)	(17)	(17)	(17)	(17)	(44)	(17)
中央 高校 生徒 会 主任	中央 高校 2年 学 年 主 任	中央 高校 2年 2組 担 任	中央 高校 2年 6組 生 徒	中央 高校 2年 2組 生 徒	中央 高校 2年 2組 生 徒	中央 高校 2年 2組 生 徒	雅也 の 母	中央 高校 2年 2組 生 徒

1 中央高校・全景（朝）

2 同・生徒会室

雅也がやってくる。

雅也「失礼します」

デスクに座っている生徒会主任・井深

武彦（39）が迎えると、

井深「あれ、木内どうした？」

木内「学校祭の実行委員会で来たんですけど、

井深先生、何か御存知ありませんか？」

井深「ああ、そういえば名簿に木内の名前あ

ったな。みんなだったら調理室で作業して

るよ」

木内「ありがとうございます」

3 同・調理室

既に生徒たちが来ており、看板の装飾

や、画用紙を切るなどの作業をしてい

る——雅也が入ってくる。

雅也「失礼します」

と、生徒の一人・藤野真弓（17）が
迎えると、

真弓「実行委員ですか？」

雅也「名簿に名前を書いた、木内と言います」

真弓「生徒会書記の藤野真弓です。よろしく」

雅也「よろしくお願いします」

真弓「早速だけど、看板作り手伝ってください

る？」

雅也「分かりました」

と、真弓と共に作業中の生徒たちのも
とへ行く。

真弓「（生徒たちに）実行委員の木内君。こ

れから一緒に準備を手伝ってください」

雅也「木内です。よろしくお願いします」

と、生徒たちと共に準備をしていく雅
也。

4 同・生徒会室（夕）

井深が仕事をしている——雅也、真弓、
その他の生徒たちが戻ってくる。

真弓「今日の作業、終わりました」

井深「お疲れ様」

真弓「明日も来れる方は、よろしくお願います。ありがとうございました」

一同「ありがとうございました」

5 木内家・玄関く居間（夕）

雅也が帰宅する。

雅也「ただいま」

と、真保が夕飯の支度をしている。

真保「お帰り。遅かったわね、今日」

雅也「しばらく、これぐらいの時間になるかも。学校祭の準備があるから」

真保「学校祭の準備？」

雅也「あれ、言わなかったっけ？ 今年、学校祭の実行委員会に入ったの」

真保「大丈夫なの？ 部活もあるし、また検定受けるって言ったでしょ。あまり無理しちゃダメよ」

雅也「分かってる」

真保「これぐらいの時間になると、小腹も空

くだろうから、菓子パンか何か持つてく？」

雅也「別に大丈夫。うちの心配より、健はど

うなの？ あれから特に健も何も言わなく

なっただけど、クラスでやってけるのか

な？」

真保「先生たちがいろいろと協力してくれて

るから、何とか学校には行けてるわ」

雅也「なら良いけど。あいつのことだから、

また学校に行きたくないなんて言い出しか

ねないでしょ」

真保「でも、学校には行ってもらいたいから

ね」

雅也「別に良いんじゃない。嫌なら休めば」

真保「何てこと言うのよ」

雅也「卒業さえできれば良いよ。出席日数と

か成績だつてそりや大事かもしれないけど、

まずは卒業できて、進学先の高校さえ見つ

かればそれで良いんじゃない？」

真保「急にどうしたのよ」

雅也「高校に入学してから、当然成績は気にしてた。でも中学と違って、高校は留年がある。みんなと進級したいから、何があっても留年だけはしたくないって思ってた。だから成績が多少悪くても、ちゃんと進級さえできれば、あとはどうでも良いかなと思ってる」

真保「……」

雅也「だから健も、クラスが嫌で学校に行きたくないんだったら休めば良いんだよ。義務教育だから勝手に進級できるんだもん。それにね、中学校で学んだ勉強なんて、テストが終わったらその範囲はどうせすぐに忘れるんだから。俺だって、中一の時に習ったことなんてもう忘れたよ。結局勉強ってそんなもんなんだよ」

返す言葉もなく黙ったままの真保。

6 中央高校・2年2組教室

雅也が登校してくる。

雅也「おはよう」

雅也が自席に座ると、優菜も登校してくる。

優菜「おはよう、うちー」

雅也「おはよう、優菜」

優菜「ねえ、学校祭の団って私たち二組と、一組と四組の三クラスが赤団っていう一つのチームになるんだよね」

雅也「そうだね」

優菜「係、何やる？」

雅也「俺は、P R委員会やってみようかと思ってる」

優菜「良かった」

雅也「何が？」

優菜「実はさ、私と寧々がP R委員会やろうと思ってたんだけど、もう一人上手いこと私たちと一緒に盛り上げてくれる人がいると良いかなと思ってるんだけど」

雅也「もしかして、俺が入ればちょうど良いって思ってる？」

優菜「そういうこと」

雅也「分かった。任せといて」

優菜「ありがとう」

× × ×

時間経過――。

雅也と優菜が教卓の前で話している。

教室の後ろで聞いている西澤。

雅也「学校祭のPR委員会で、皆さんに相談したいことがあります。PR委員会の中心は、僕たち二組が動くことになりましたが、せつかくなので二組の特性を生かそうと、パソコンで皆さんにポスターを作ってもらおうかなと思っています」

ざわつく生徒たち。

優菜「PR委員会っていう名前なので、私たち赤団の特色が分かるように宣伝できたらなと思っています」

西澤「木内、ちょっと良いか？」

雅也「はい」

西澤「PR委員会がやるのは、ステージ発表

か応援合戦って聞いてるけど」

優菜「え、そんな話聞いてないですけど」

雅也「……」

西澤「もう一回、企画練り直したほうが良いかもしれないな」

思わず顔を見合わせる雅也と優菜。

× × ×

時間経過——。

顔を伏せている雅也——憐れむように

見ている優菜と寧々。

寧々「元気出しなよ」

雅也「応援合戦かステージ発表にするんだっ
たら、最初からそうやって言ってくれれば
良いのに。こんなグダグダになるなんて思
わなかった」

と、壮吾が入ってくる。

優菜「あれ、そーぴどうしたの？」

壮吾「忘れ物取りに。(と雅也に) どうした
うちー、元気ないじゃん」

雅也「そりゃ元気もなくなるに決まってるで

しよ」

壮吾「ほんと、グダグダだったね」

雅也「やっぱりそう思うでしょ。それに、今日はかどけんも志田も休んでたから、心細かったしさ。ホント、どうしたら良いのやら……」

壮吾「そんなネガティブで良いのか。もっとテンション上げていこうぜ！」

雅也「どうした？」

壮吾「と、柄にもない台詞言ってみた」

雅也「（笑って）ありがとう、そーびにそう言ってもらえるだけで嬉しいわ」

頷く壮吾。

N「しかし、この学校祭のPR委員会は、なかなか上手くはいかなかったのです」

7 同・2年1組教室

雅也、優菜、寧々が座っている——
周 囲には一組の女子生徒たち、四組の男子生徒たちがそれぞれ固まって話して

いる。浮いているように面白くない顔の雅也たち。

優菜「（小声で）ねえ、P R委員会の企画書提出、今日がメ切なんですよ」

雅也「そうだよ」

寧々「（周囲を見て）何、この余裕」

雅也「みんな、P R委員長の俺に面倒くさいことは押し付けてるから、何の焦りのものもないだよ」

寧々「そんな」

優菜「（一同に）あの、そろそろ話まとめませんか？」

女子生徒A「P Rすれば良いんですよ。適当にステージ発表で良いんじゃない？」

男子生徒A「いや、どうせ盛り上げるんだつたら応援合戦が良いに決まってるだろ」

女子生徒B「けど、覚える時間なんてないじゃない」

男子生徒B「じゃあ、作れば良いじゃないか」

女子生徒C「振付とかも考えなくちゃいけない

いんだよ。誰が考えるの」

雅也「はい。（と挙手をして）じゃあ、間を取ってステージ発表の中で寸劇みたいな短い発表するのはどうですか？」

男子生徒C「でも、台詞覚えるの面倒くせえじゃねえか」

雅也「（呆れて）……」

女子生徒A「ステージ発表は良いけど、寸劇はちよつとねえ……」

優菜「（呆れて）……」

女子生徒B「まあでも、それが一番やりやすいんじゃないかな。台詞さえ少なければ、私たちでも何とかなるでしょ」

雅也「台本は俺が書きます。負担にならないように、皆さんの台詞は極力短くしておきますから」

女子生徒C「じゃあ、それで良いんじゃない。後の段取りは、二組の人に任せる。私たちは色彩検定と学校祭に出店するミニチュア着物作りで忙しいんで」

呆れ顔で顔を見合わせる雅也、優菜、
寧々。

8 同・2年2組教室

雅也、優菜、寧々が不機嫌そうに戻っ
てくる。

優菜「何、さっきのあいつらのあの態度」

寧々「本当、一体何様のつもりだよ」

雅也「反論する気にもならなかった」

寧々「ママ、大丈夫なの？ 台本書くなんて

言っちゃったけど」

雅也「しようがないでしょ。あそこでああや
って解決策出しとかないと、今日のメ切に
は間に合わないんだから。ステージ発表で、
スライドと動画を編集したPR映像を流そ
うって企画も考えて、一応企画書にも書い
ただけど、無駄になっちゃったわ」

優菜「あいつら、うちーのこと何だと思っ
てるんだらうね」

雅也「結局、PR委員会の委員長っていうも

のはそういう面倒な役回りだってことよ」

寧々「台本書く時間ある？」

雅也「そこは大丈夫。最悪、説明が必要な長

い台詞は、俺が裏でナレーションって形で

話すから」

優菜「もう構想浮かんでるんだ」

寧々「さすがだわママ」

雅也「とにかく、今すぐ企画書書き直して、

生徒会室に出してこないと」

寧々「私たちがやるわ。ママ、少し休んでて」

優菜「そうだよ。私たちだっているんだから」

雅也「ありがとうございます。じゃあ、お願いします。

俺は、ちよっと休みます」

と、机に顔を伏せる——微笑んで見て

いる優菜と寧々。

9 木内家・雅也の部屋

雅也がパソコンでブログを書いている。

雅也の声「今日、PR委員会の顔合わせがありました。企画書を書いて、今日提出と言

われていたのに、企画書の出番は全くなし。
慌てて、企画書書いたのに……。最近、自
分でやった事が、無断になってきているよ
うな……。メンバーも不安になってしまし
た。三クラスで、心を一つにしていけるか
な……。これからどうなるんだろう……。」「
難しい顔の雅也。

10 杉山家・優菜の部屋

優菜が携帯電話で、雅也のブログを見
ている。

優菜「大丈夫かな、うちー……。」「

11 中央高校・昇降口（朝）

雅也が登校してくる——疲れ切った顔
をしている。と、優菜も登校してくる。

優菜「おはよう、うちー」

雅也「ああ……。優菜、おはよう」

優菜「大丈夫？ ブログ見たけど」

雅也「……。」「

優菜「他のクラスはどうしようもないけどさ、
二組のPR委員会は大丈夫よ。私と寧々が
ついてるんだから」

雅也「うん……ありがとう」
作り笑いでごまかす雅也。

12 同・職員室前の廊下

生徒たちの行列ができている——佐藤
が椅子に座っており、小テストの追試
を行っている。雅也がそこへやってく
ると、

雅也「うわ、何だこの行列……」

と、真弓もやってくる。

真弓「あれ、木内君？」

雅也「真弓さん」

真弓「木内君も追試？」

雅也「うん。けど、こんなに並んでは思
わなかった」

真弓「私、五十川君と同じクラスで、あの子
から聞いたんだけど、木内君って脚本書い

てるの？」

雅也「まあ、趣味だけどね」

真弓「いつか有名な脚本家になってよ。私、吹奏楽出身で音楽に興味あるから、木内君が脚本担当したドラマは、私が音楽つける」

雅也「そう言ってもらえるだけで嬉しいわ。」

何だったら、真弓さんキャストとして出演したら？ 真弓さん綺麗だから、映像でちやんと映えると思う」

真弓「（照れて）そうかなあ」

雅也「メインキャストでも十分行けるよ。真

弓さんをイメージして脚本書こうかな」

真弓「やった。その時は喜んで出演しちゃう」

雅也「ぜひ出演してくださいな」

笑い合う雅也と真弓。

N「PR委員会の一件以来、少し疲れ気味になっ
ていました。こうして同級生の人と話していると、自分
は一人じゃない。助けてくれたり、応援してくれる人
がいるんだと実感していました」

13 同・全景

セミが鳴いている――。

14 同・2年2組教室

雅也を始めとする生徒たちが、荷物の整理や掃除をしている。

N 「P R委員会のほうは、優菜や寧々の助けも借りて何とか準備は進んでいました。そして七月に入り、僕たちが使っている校舎が耐震工事をする事になり、工事が終わるまでは渡り廊下の先にある職員室棟の二階、定時制の教室として使われている一室を二年二組の教室とするため、その引っ越し作業が始まりました」

15 同・S R 2 教室

引っ越しが終わり、雅也と優奈が作業をしている――西澤が通りかかると、西澤「引っ越しお疲れ様。定時制の教室を使

わせてもらってるから、さつきも絡をしたように、帰るときは、定時制の生徒が使う配置に机を並べ替えてから帰宅するように（と去っていく）」

雅也 「分かりました」

優菜 「（前の席に座る雅也に）ねえ、少し教室狭くない？」

雅也 「しよがないでしょ。定時制の教室だから、多分ちよっと教室の面積が狭いんだよ」

不満げな顔の優菜。

N 「そして、この引越してから間もなく、僕は職場体験、俗にいうインターンシップ事業で、母校の中学校を訪れ、四日間事務職員の職場体験を行いました」

16 中学校・全景

17 同・職員室

事務職員に教えてもらいながら、パン

コンの画面操作をしている雅也。

N 「この四日間の職場体験で、僕は学校の事務職員という貴重な体験をさせていただきました。この体験は僕にとってかけがえのないものになったのですが、実はこの時、僕は事務職員になろうか、それとも脚本家になろうか、進路の選択に悩んでいる時期でもありました。そして、インターンシップが終わって、間もなくのこと……」

18 中央高校・職員室

西澤が仕事をしている——雅也が入ってくる。

雅也 「失礼します、西澤先生、よろしいでしょうか？」

西澤 「木内、どうした？」

雅也 「進路のことなんですけど」

西澤 「……？」

雅也 「僕、事務職員はやめます」

西澤 「やめる……？」

雅也「脚本家になります」

西澤「脚本家……？」

雅也「はい。インターンシップで、事務職を経験させていただいた上で判断したんです」

西澤「けど、どうして急にそんな？」

雅也「これまで、僕はパソコンが使えるから、事務職だったら安定しているという安易な気持ちを持っていました。でも、どうせだったら創作活動の脚本を、趣味ではなく仕事にしたいと思ったんです」

西澤「……」

N「突然の進路変更でしたが、この選択に僕自身は一切後悔していませんでした。むしろ、自分にとっては何よりの英断とも思っていたのでした」

つづく